

5 白い絵の具の上にさらに白を重ねながら息を、す、と止めて筆を走らせる。二〇一一年、二月のおわりのことだった。岩手県立盛岡大鵬高等学校の木の匂いのする美術室に一人で籠り、黙々と白に白を重ねる。私は高校二年生で、学年が上がった次の夏には最後の絵画コンクールが迫っていた。キャンパスには大きな滝の絵を描いていた。不動の滝という八幡平市の祖母の家の近くにある滝の絵を、どうしても描き残したいと思ったのだった。キャンパスの横に並べば自分の腰より太い水しぶきは描き足すほどに愛着がわく。一時間くらいして下校のチャイムが鳴ると、かたたた。乾いた音を立てて美術室の扉が開いた。

「また太くなつたなあ」

10 入ってきた顧問のみかちゃんは絵を見て腕を組みながら言う。みかちゃんはビビッドピンクのフリースを着ていて、今日は巻き髪をきれいにハーフアップにしている。

「だって太いんですよ、ほんものは、ほら」

携帯の画面を開いて不動の滝の写真を表示して見せようとする、もう百回見たつちゅうの、と言いまかちゃんは見ようとしなかった。

15 「伊智花の絵って、とにかく勢いがあるよ。見てるだけでつめたい滝の水がこつちに飛んでくるっていうかさ。その勢いで炎とかも描いてみたら。いま寒いからさ。暖をとれるような絵つちゅうか」

「描きませんよ。滝。納得いくように描けるまでは滝です」

20 おーこわ。暖房とまるし風邪ひくからもう帰んな。と言ひ、チョコレートをひとつ机に置いてみかちゃんは職員室に戻って行った。納得いくように、と、とっさに言ってしまった。納得いくように描きたいんだな、私は。と思う。不動の滝が好きだった祖母が、夏に亡くなった。両親が共働きで、小学校のころは放課後をほとんど一緒に過ごしていたからとてもショックだった。不動の滝の大好きな祖母に捧げるような気持ちで、祖母と対話をしているような気持ちで、私は夢中で滝を描いていた。去年の全国コンクールは北上川の絵を描いて優秀賞。上位の三人は私よりも一学年上だったから、実質、同学年の中では一番最優秀賞に近いところにいるaジフがあった。納得がいく滝を描けるようになるまで、半年かかった。その間に、震災が起きて岩手県はめちゃくちゃになっ

た。

45 二〇一一年三月十一日。私は課外学習がちょうど休みで、盛岡にある自宅にいた。遅く起きて、午後一時頃に袋ラーメンを作って食べ、どんぶりも片づけずそのままテレビを見ていた。と音がして、それからすぐに揺れた。つかんだ肩を揺らされているような、ぐわり、ぐわりと円を描くような揺れだった。とっさに居間に飾ってあった大皿が割れてしまうと思い、寝かせる。ぷちん、とテレビが消える音がした。それから食器棚を押さえていたけれど、あまりにも普通ではない揺れだったので食卓の下に潜った。避難訓練って意味あるんだ、と、妙に冷静に思う。頭では必死に冷静なことを思っても、鼓動が耳のそばではくばくと聞こえた。揺れが収まった後もしばらくどきどきして、①「大丈夫大丈夫」と独り言を繰り返した。テレビもつかないし、部屋のラジオは有線のものだが、スイッチを入れてもつかなかった。無線のラジオ、どこにあったんだっけ。停電か、それともブレーカーが落ちたのか？ うちだけが停電なのだろうか。もしかしたら近所さんとおばあさんが二人で薄着ないと思う。また揺れたらどうしようと思いつつ外へ出ると、お隣の家のおじいさんとおばあさんが二人で薄着のまま玄関の階段に並んで座って空を眺めていた。駆け寄って「すごかったですね、揺れ」と、思わず話しかけると、風もないのに電線がまだゆあんゆあん揺れている。携帯を開くと震度五以上と表示されたので「震度、五以上だそうですね」と伝えると、「んだべねえ」とおばあさんがしみじみと言った。家の中に戻ったら、母から電話がきた。

40 「伊智花、怪我はなかった？ そう。大丈夫だからね、大丈夫。しっかりしないとね。家に伊智花がいて助かったよ。頼りにしてる。もし行けそうなら買い物に行ってくれる？」

母の大丈夫、は私に言っているのではなく、自分に言い聞かせているようだった。水道と電気が止まった。結局停電だったのだ。ガスはプロパンのところはいつも通りだったらしいけれど、我が家はオール電化だったので、あらゆる家電や暖房が使えなくなった。病院勤めの母はなかなか職場から帰ってこず、水道会社に勤めていた父もてんやわんやのようだった。

(中略)

水道は二日止まって復旧し、電気は三日目のお昼前には復旧した。すぐにテレビをつけると、そこに流れたの

は真つ黒い波がいくつもの家を飲み込む映像だった。②うそじゃん。と声が出た。CGか、映画かと思った。波
があまりに大きくて、遠近感がよくわからない映像だった。切り替わって、避難所からの映像。たくさんの避難
者が画用紙を持って、座り、中腰になり、立ち、つまさき立ちをし、集合写真を撮るように並んで画用紙をカメ
ラに向けていた。そこには名前が書かれていた。「〇〇一家、全員無事です」「お父さんと長男は無事です、長
女の〇〇、もしどこかの避難所にいるなら、連絡をください」「〇〇さん、どこですか、必ず、会いましょう」。
みな、妙に力強い顔をしていた。絶対に大丈夫だ、と、そう思わないと居られないような気迫があった。(中略)
学校は、しばらく休校になった。(中略) 予想外に延長された春休みは妙な居心地の悪さがあった。テレビは
ACの同じCMばかりで、ニュースは毎日のように犠牲者の人数や、救助活動の様子を伝えた。

四月末、新学期がようやく始まった。制服の学年章を三年生のものに付け替えて、新しい教室に足を踏み入れ
た。新しいクラスのうち、ふたりが欠席していた。実家が沿岸で、片付けなどの手伝いをしてしていると担任は言っ
た。私は美術室に通う毎日を再開した。美術部は幽霊部員がほとんどで、コンクール四カ月前の部室でキャンバ
スに向かう部員は私だけだ。木の匂いと、すこしだけニスの匂いがある美術室にいと、気持ち研ぎ澄まされ
ていくのがわかった。使い古されたイーゼルを立てて、両腕をいっぱい伸ばしてキャンバスを置く。私は改め
て、集大成の滝を描こうと思った。不動の滝の写真を携帯に表示して、じつと眺めて、閉じる。大きく息を吸っ
て、アタリの線を描き始める。③自分のからだのなかに一本の太い滝を流すような、絵のなかの音を描きだすよ
うな、豪快で、繊細な不動の滝で、必ず賞を獲りたい。獲る。描きたすほどに、今までの中でいちばん立体的な
滝になっていく。

七月のある日、顧問のみかちゃんが一枚のプリントを持ってきた。
「やる気、ある？」
「みかちゃん、懇願のような**bシヤザイ**のような何とも複雑な表情をしていた。そのプリントにはへ絵画で
被災地に届けよう、絆のメッセージ♪ ぐんばろう岩手」と書いてある。
「これは」

「教育委員会がらみの連盟のほうでそういう取り組みがあるみたいで、高校生や中学生の油絵描く子たちに声か

けてるんだって。伊智花、中学の時に賞獲ってるでしょう。その時審査員だった連盟の人が、伊智花に名指しで
ぜひ描かないかって学校に連絡があつて」

「はあ」
「県民会館で飾って貰えるらしいし、画集にして被災地にも送るんだって」
「被災地に、絵を？」

「そう」

「絆って、なんなんですかね。テレビもそればかりじゃないですか」

「支え合うってこと、っていうか」

「本当に大変な思いをした人に、ちよつと電気が止まったくらいなのわたしが『応援』なんて、なにをすればいい
のかわかんないですよ」

「そうだね、むずかしい。でも絵を描ける伊智花だからこそ、絵の力を信じている伊智花だからこそできること
でもあるんじゃないか、って、わたしは思ったりもするのよ」

「じゃあ、何を描けば」

「鳥とか、空とか、花とか、心が安らぐような、夢を抱けるような、希望や絆があつて前向きなもの、って、連
盟の人は言ってた」

「④……描いた方がいいですか」

「描いた方が、いろいろと、いいと思う、かな」
それから私は不動の滝の絵を描きながら、へ心が安らぐような、夢を抱けるような、希望や絆があつて前向き
なもの」のことを考えた。虹や、双葉が芽吹くようなものは、いくらなんでも「希望つぽすぎる」と思ってやめ
た。そもそも、内陸でほとんど被害を受けていない私が何を描くのもとても失礼な気がした。考えて、考えて、
結局締切りぎりぎりになって、通学の道中にあるニセアカシアの白い花が降る絵を描いた。その大樹のニセアカシ
アは、毎年本当に雪のように降る。あまりの花の多さに、花が降るたびに顔をあげてしまう。顔をあげるから前
向きな絵、と思ったが、花が散るのは不謹慎だろうか、と描きながら思って、まぶしい光の線を描き足し、タイ
トルを「顔をあげて」とした。みかちゃんは「これは、すごいわ」と言つてその絵を出展した。私の絵は集めら
れた絵画の作品集の表紙になった。その作品集が被災地に届けられ、県民会館で作品展が開かれるとなったら新

聞社が学校まで取材に来た。

「顔をあげて」このタイトルに込めた思いはなんですか？」

と、若い女性の記者はまぶしい笑顔で言う。あ。絵じゃないんだ。と思った。枝葉のディテールや、影の描き方や、見上げるような構図のことじゃないんだ。時間がない中で、結構頑張って描いたのにな。取材に緊張してこわばるからだから、力がすいと抜けていく感覚がした。この人たちは、絵ではなくて、被災地に向けてメッセージを届けようとする高校生によるこんでいるんだ。そう思ったら胃の底がぐつと低くなって、からだにずっしりとした重力がかかっているような気がしてきた。記者は⑤いますぐ走り書きができるようにペンを構えて、期待を湛えてこちらを見ている。

「申し訳ない、というきもちです。わたしはすこしライフラインが止まったくらいで、たくさんものを失った人に対して、絆なんて、がんばろうなんて、言えないです」

記者は「ンなるほど、」と言ってから、⑥しばらくペンを親指の腹と人差し指の腹でくにくに触り、それから表紙の絵を掲げるようにして見て、言った。

「うーん。でも、この絵を見ると元気が湧いてきて、明るい気持ちになって、頑張ろうって思えると思うんですよ。この絵を見た人にどんな思いを届けたいですか？」

「そういうふうに、思ってもらえたら、うれしいですけど」

私は、早く終わってほしい、と、そればかり考えていた。描かなければよかったと、そう思った。そのあと、沿岸での思い出はあるか、将来は画家になりたいのかどうかなど聞かれて、私はそのほとんどを「いえ、とくに」と答えた。そばにいたみかちゃんは手元のファイルに目線を落として、私のほうを見ようとしなかった。記者が来週までには掲載されますので、と言いながら帰って行って、私は、みかちゃんとふたりになった。深く息を吐き、吸い、「描かなければよかったです」と、まさに言おうとしたそのとき、

「このさ、見上げるような構図。木のとっぺんから地面まで平等に、花が降っているところがすごい迫力なんだよね。光の線も、やりすぎじゃないのにちゃんと光として見える、控えめなのに力強くてさ。伊智花の絵はすごいよ。すごい」

と、みかちゃんはしみじみ言った。

「そう、なんですよ。がんばりました」

と答えて、それが涙声になっているのが分かって、お手洗いへ駆け込んで泣いた。悔しいよりも、うれしいが来た。⑦私はこの絵を見た人に、そう言われたかったのだ。

それからの一カ月間、私は不動の滝の絵を力いっぱい描いた。同級生や親戚から「新聞見たよ」と連絡が来て、そのたびに私は滝の絵に没頭した。

⑧この絵を見て元気が湧いたり、明るい気持ちになって、頑張ろうって思ってもらえたらうれしいです。と、加藤伊智花（いちか）さん（盛岡大鵬高等学校三年）は笑顔を見せた。

と、その記事には書かれていた。⑧ニセアカシアの絵のことを考えるとからだも頭も重くなるから、私は滝の絵に没頭した。光をはらんだ水しぶきに筆を重ねるごとに、それはほとばしる怒りであるような心地がした。流れろ。流れろ。流れる。念じるように水の動きを描き加える。この心につかえる黒い靄をすべて押し流すように、真っ白な光を、水を、描き足した。亡くなった祖母のことや賞のことは、もはや頭になかった。私は気持ちを真っ白に塗りなおすように、絵の前に向かった。

描き終えて、キャンバスの前に仁王立ちする。深緑の森を真っ二つに割るように、強く美しい不動の滝が、目の前に現れていた。滝だった。私が今までに描いたすべての絵の中でいちばん力強い絵だった。「怒濤」と名付けて、出展した。

145 高校生活最後のコンクールは昨年の優秀賞よりもワンランク下がって、優良賞だった。私よりもどう見ても画力のある他校の一年生の描いた校舎の窓の絵や、着実に技術を伸ばした同学年の猫の絵が、上位に食い込んでいた。最優秀賞は、私と同じ岩手県の沿岸、大船渡市の女子生徒のものだった。ごみごみとしてどす黒いがれきの下で、双葉が朝露を湛えて芽吹く絵だった。あまりにも作画的で、**シヤジツ**的とは言にくいモチーフだった。色使いも、陰影と角材の黒の塗り分けが曖昧で、朝露の水滴の光り方もかなり不自然。これが最優秀賞。そんな可笑しいだろうと思った。最優秀賞を受賞した生徒は高い位置にポニーテールをして、肌がこんがり焼けている、明るそうな人だった。東京で行われた授賞式で、私は初めてその人の顔を見た。

「わたしはあの日、家と母を亡くしました。避難所でしばらく暮らして思ったのは『絵を描きたい』という強い思いでした。いまはテニス部だし、しばらく描くことから離れていました。そんなわたしでも、絵を描いて

150 いる間、わたしはわたしの内側にあるきもちと対話することができました。暗いがれきの中で泣いて、怒って、悲しんでいたはずの、どこに向かえばよいかわからなくなっていたわたしは、それでも最後にこの双葉を、気が付いたら、描いていました。こんな荣誉ある賞をいただき、どうしていいのか……」

と、彼女は手元のメモをちらちら見ながら、押し出すようにとぎれとぎれに言った。審査員席に並んでいる六十代くらいの女性は、ハンカチで目元を押さえていた。私も喉の奥がぐつとせりあがってきて、熱くて苦しかった。⑨彼女の言葉には不動の滝を描いていた時の自分とどこか重なるものがある。それなのに、私は、それでもあ。やっぱ絵じゃないんだ。と思った。審査されているのは純粹にこの作品ではなく、「この作品を描いた

155 高校生」なのではないか。作品と作者の不遇を紐づけてその感動を評価に加点するならば「特別震災復興賞」という賞でも新設すればよかったのに、とすら思った。

160 「あのお、本当に、こういった、ね、たいへんな、未曾有の、あのお、そういう、事が起きたわけですが。こういった状況の中で、えー、筆を持つことを、うん。あきらめなかった彼女に、審査員一同、希望のひかり、そして絵の持つ力を再認識しました」

と、審査員のひとりと言った。その審査員は東京の高校の美術教師だった。震災のことを「あのお、そういう、事が起きた」としか言えないような人が言う「希望のひかり」って、いったい何なのだろう。

165 無冠の絵となってしまうたものの、私は滝の絵をとでも気に入っていた。返却された絵を改めて美術室に運び入れ、イーゼルの上にのせる。水面に向かって茂っている深緑色の木々。その闇を分かつような白い滝。目を閉じれば音が聞こえてくるような水しぶき。その絵の上流から下流まで目で三度なぞり、二歩下がってもう一度眺めた。いい絵だ、と思った。どうしてこれがあの絵に負けてしまったのか、本当はまだ納得がいかなかった。

お手洗いで戻ると、下校確認の巡回をしていた世界史の、たしか榊という名の教師がノックもせず美術室に入ってきて、私の絵を見た。

「CGみてえな絵だな、これ、リアリティがよ。部員が描いたのか？」

170 私は自分の絵だというのが気恥ずかしくて「そうみたいです」と答えた。

「立派な絵だよな。ちよっと、今このご時世で水がドーンと押し寄せてきて、おまけにタイトルが『怒濤』ってのは、ちよっときつすぎるけど、俺は意外とこういう絵がすきなんだよ」

175 榊はキャンバスの下につけていたキャプションの紙の「怒濤」という文字を、人差し指でちろちろと弄んでから、イオッシ！ 早く帰れよな、と言って、次の見回りへ行った。

180 榊が出て行ったあと、私はしばらくこの絵に近づくことができなかった。五歩くらい離れた場所から絵を睨んでは、さつき榊が言っていた言葉を何度も頭の中で繰り返した。右足が自然に浮いて、地面について、それを繰り返す。大きな貧乏ゆすりをしている自分がいた。何度も足をあげ、おろす、あげ、おろす。指定靴のスニーカーの底の白いゴムが床につくたびに、きよ、きよ、きよ、と間拔けな音がした。⑩なるほどね。だから、だから私の滝の絵は賞を獲れなかったってことね。私から私が剥がれていく感覚がした。あーあ、そういうことだった。だった。でした。はい。なるほどね。なるほど、なの？ 黙ってニセアカシアの絵を描けばよかったんだろうか。心が安らぐような、夢を抱けるような、希望や絆があって前向きなもの。鳥や、花や、空を、描けば。

185 ⑪「この絵を見て元気が湧いたり、明るい気持ちになって、頑張ろうって思ってもらえたらうれしいです」

と、小さく声に出して言う。言って、左足を下げて、助走をつけて絵に向かって走る。迫力のある滝のしぶきに私が近づいていく。蹴とばそう、と思った。こんなもの、こんなもの！ 私は思い切り右足を後ろに振り上げて、その反動を使って勢いよく蹴った。いや、蹴ろうとした。「んら！」と、声が出た。しかし私は絵を蹴ることができなかった。とっさに的をずらし、イーゼルの蹴った。蹴り上げられたイーゼルの左の脚が動いてバランスが崩れ、キャンバスの滝がぐらりと大きく揺れた。私は倒れ込もうとする滝へ駆け寄った。両手でキャンバスの両端を支えて持ち上げると、イーゼルだけが鋭い音を響かせて床へ倒れた。

190 吹奏楽部のdキンカン楽器が、ばおー、と、さつきから同じ音ばかりを出している。それがそういう練習だと知っていても、間拔けなものだった。⑫夕方の美術室にひとりきり、私は私の滝を抱きしめていた。

(くどうれいん『氷柱の声』より)

〈語注〉

- ※①震災が起きて岩手県はめちゃくちゃになった：地震の被害は岩手県全域におよび、特に太平洋沿岸部は、地震によって発生した津波で大きな被害を受けた。
- ※②CG：コンピュータ・グラフィックスの略。コンピュータで作成された画像や動画。
- ※③テレビはACの同じCMばかり：当時一般のCMは放送されず、代わりにAC（公共広告機構）のCMばかりが流されていた。
- ※④幽霊部員：所属はしているが、実際には活動に参加していない部員。
- ※⑤イーゼル：キャンバスを立てかける台。
- ※⑥アタリの線：絵の描き始めにつける、目当てや手がかりの線。
- ※⑦不謹慎：相手への心配りが足りず、状況にふさわしくない。
- ※⑧ディテール：細部。
- ※⑨ライフライン：生活に最低限必要な、電気・ガス・水道など。
- ※⑩怒濤：激しく荒れる大波。
- ※⑪作画的：わざとらしい。
- ※⑫モチーフ：絵のもとになる題材。
- ※⑬不遇：不幸なめぐり合わせ。
- ※⑭未曾有：これまでにない。
- ※⑮キャプション：表題、見出し。

〔設問〕 解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

- 一 ―― 線 a 「ジフ」(21行目)、b 「シャザイ」(69行目)、c 「シャジツ」(142行目)、d 「キンカン」(190行目) のカタカナを、漢字で書きなさい。

二 ―― 線① 「『大丈夫大丈夫』と独り言を繰り返した」(31行目)とありますが、「私」がこのようなことをしたのはなぜですか。説明しなさい。

三 ―― 線② 「うそじゃん。と声が出た」(48行目)とありますが、この時の「私」の気持ちを説明しなさい。

四 ―― 線③ 「自分のからだのなかに一本の太い滝を流すような、絵のなかの音を描きだすような、豪快で、繊細な不動の滝で、必ず賞を獲りたい。獲る」(63～64行目)とありますが、この時の「私」について述べたものとしてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 大切なものを失う体験をしたので、大好きだった祖母を思い出させてくれる優しい滝の絵を描き、それを評価してほしいと思っている。

イ かつてない混乱の中にいるので、自分を揺るぎないものにしてくれるような力強い滝の絵を描き、それを評価してほしいと思っている。

ウ あまりにつらい現実の中にいるので、その現実を忘れさせてくれるような幻想的な滝の絵を描き、それを評価してほしいと思っている。

エ 言葉にできないような恐ろしい経験をしたので、それが相手に伝わるような激しい滝の絵を描き、それを評価してほしいと思っている。

五 ―― 線④ 「……描いた方がいいですか」(88行目)とありますが、「私」がこのような態度を示すのはなぜですか。その理由としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 自分は納得いくまで冷たく厳かな滝を描きたいと思っているので、被災地の人々をいやすような温かく穏やかな題材を描くことに對して、自信が持てなかったから。

イ 被害を受けなかったからこそ滝の絵を描くことができている自分が、被災地の人々のためという名目でさらに新たな絵を描いてもよいのか、分からなくなったから。

ウ 滝の絵を描くことだけで精一杯だったのに加えて、大きな被害を受けたわけでもない自分が安易に被災地の人々を励ます絵を描くことに對して、違和感を覚えたから。

エ 滝の絵の制作によりやく集中できるようにになった時に、被災地の人々を励ますためとはいえ、教師がテーマの決まった絵を描かせようとすることに怒りを感じたから。

六——線⑥「しばらくペンを親指の腹と人差し指の腹でくくに触り」(108行目)とありますが、——線⑤「いますぐ走り書きができるようにペンを構えて」(104行目)いた「記者」の筆が進まないのはなぜですか。説明しなさい。

七——線⑦「私はこの絵を見た人に、そう言われたかったのだ」(124行目)とありますが、「私」は「この絵」について、どのような点をほめてほしかったのですか。説明しなさい。

八——線⑧「ニセアカシアの絵のことを考えるとからでも頭も重くなるから、私は滝の絵に没頭した」(130、131行目)について、

(1)「ニセアカシアの絵のことを考えるとからでも頭も重くなる」のはなぜですか。説明しなさい。

(2)この時の「私」にとつて、「滝の絵に没頭」することはどのような意味がありますか。説明しなさい。

九——線⑨「彼女の言葉には不動の滝を描いていた時の自分とどこか重なるものがある」(153行目)とありますが、「彼女」と「私」とはどのような点で重なっているのですか。説明しなさい。

十——線⑩「なるほどね。だから、だから私の滝の絵は賞を獲れなかったってことね」(179、180行目)とありますが、「滝の絵」が「賞を獲れなかった」のはなぜだと「私」は理解したのですか。説明しなさい。

十一——線⑪「『この絵を見て元気が湧いたり、明るい気持ちになって、頑張ろうって思ってもらえたらうれしいです』と、小さく声に出して言う」(183、184行目)とありますが、この時の「私」について述べたものとしてふさわしいものを、次のア、エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 賞を獲るためには人々からの期待に応えたふるまいをする必要があるが、それでは自分を偽(いつわ)ると思っている。

イ 賞を逃(のが)した理由に気がついてこだわりがなくなり、自分はもともと絵で誰か(だれ)を元気づけたかったのだと改めて感じている。

ウ 今回の経験を通して賞の獲り方が分かったような気がしたので、自分が受賞できた時のことを具体的に思い浮かべている。

エ 賞を獲れない絵を描いていた自分の姿勢について考え直し、これからは人に評価される絵を描こうと固く心に決めている。

十二——線⑫「夕方の美術室にひとりきり、私は私の滝を抱きしめていた」(191行目)について、

(1)「私の滝」とありますが、~~~~線「不動の滝の大好きな祖母に捧げるような気持ちで、祖母と対話をしているような気持ちで」(19、20行目)描いていた「私」は、震災を経た後に、滝の絵をどのような思いで描くようになっていきましたか。震災以降の絵に向かう姿勢の変化を、二つの段階に分けて説明しなさい。

(2)「ひとりきり、私は私の滝を抱きしめていた」とは、どのようなことを表していますか。説明しなさい。

〈問題はここで終わりです〉

